

不全感の残る 終了事例を振り返る

事例提出者

Oさん（地域福祉権利擁護事業・専門員）

事例提出の理由

本人の意思を尊重した支援が難しく、地域福祉権利擁護事業の利用にはなじまなかった。現在は、事業を離れて在宅生活を継続させていることを考えると、事業でのかかわりは果たして何だったのか。援助を振り返って、じぶんのかかわりを検証したい。

クライアント

Kさん 72歳 女性

本人の障害や疾病

- ・要介護1
- ・アルツハイマー型痴呆
- ・若い頃からの高血圧があり、月1回通院しているが、もらった薬はまったく服薬していない。

手帳の有無

無し

利用者の生活状況

- ・ひとり暮らし
- ・持ち家（一戸建て）——現在は娘名義になっ

ている。

- ・年金——月20万円程度。
- ・長年にわたり公務員をしていた。定年後も数年簡単な事務の仕事をしており、60代後半まで働いていた模様。若い頃は土地や建物を投機目的で購入したり売却していたらしい。
- ・ホームヘルプサービス——週6回。
- ・通院——月1回。

同居人・家族の状況

- ・娘（夫と子ども一人）が町内に居住

地域福祉権利擁護事業がかかわる前の 本人の生活状況

- ・週6回（月～土）ホームヘルプサービスを利用しながら、ひとり暮らし。
- ・夫とは、娘がまだ赤ちゃんの時に離婚。住所も生死も知らないとのこと。娘も知らないとのことだった。
- ・かつて娘一家と同居していたことがあるが、本人と娘の夫との折り合いが悪く、ひとり暮らしをするようになった。
- ・娘との関係は悪い。本事業の相談前は、娘が通帳と印鑑を預かって金銭管理していたそうだが、そのために関係がより一層悪くなり、結局うまくいかず本人に返すことになった。
- ・本人に返してから通帳の紛失が続いたた



め、ケアマネジャーから本事業の利用について相談があった。

- ・1年ほど前から、近隣の男女6～7人（50代～80代）が本人宅に出入りするようになる。

事例の特徴、援助内容の特色

- ・最初、本人の利用意思が見られたため、契約を前提として通帳と印鑑を預かった。その後、本人からたびたび「通帳と印鑑を返して欲しい」と言われるようになったが、その時点では本人が金銭管理できないのは明らかで、かつ、本人宅に出入りする近所の人たちに飲食代（店屋物）やカラオケ代を奢って大盤振る舞いしていることがわかったため、なおさら返すに返せなくなった。
- ・その後10月になって、娘による成年後見申請が行われ、350万円の定額預金を証書化して娘の管理としたのを機に、通帳と印鑑を本人に返した。
- ・現在は、通帳と印鑑をなくす事もなく、娘と郵便局の連携でなんとか在宅生活を維持しているようである。
- ・本事業がかかっていた約4カ月の間に、結局140万円程度の現金を払い出している（通帳と印鑑の紛失を繰り返していたほうが、本事業で預かるよりもお金の払い出し額は少な

スーパーヴァイザー・奥川幸子氏を招いて開かれた事例検討会の模様を紹介します（検討会及び事例の内容は、誌面の都合及びプライバシー保護の観点から、全体の趣旨に差し支えない範囲で変更させていただきました）。

かったのではないかとと思う）。

援助の経緯

6月10日 ケアマネジャーより連絡

「4月から6月にかけて、通帳を5回紛失された方がいる。現在5回目の再発行手続きをしたところである。ご本人は嫌がって事業利用には至らないかもしれないが、とにかく事業について説明してもらえないか」

6月16日 初回訪問。事業の説明をするが乗り気ではない。

6月19日 本人から専門員に電話あり。通帳の再発行手続きの依頼。

6月21日 2回目の訪問。権利擁護事業の利用申込書にサイン。

6月29日 3回目の訪問。通帳と印鑑の預かり開始。

その後、通帳と印鑑の返却を求める電話や郵便局での払い出しの同行依頼などが毎日のようにあり、その都度対応する。

8月12日 本人の度重なる強い要望により、通帳と印鑑を返却。

6月29日の預かり開始から8月12日までの間

に、約80万円を払い出している。その後、すぐに本人は通帳と印鑑を紛失（6回目）。

8月18日 民生委員宅で、近隣の人々の出入りの問題について協議。しばらく見守りを続けることにする。

9月10日 通帳と印鑑の預かりを再開する。

10月3日 娘による成年後見申請が行われる。

10月7日 定期預金350万円を証書化し、娘の管理とした。

10月9日 通帳と印鑑を返却（娘が管理するこ

ととなる）。

9月10日の再預かり以降も、頻繁に本人から通帳と印鑑の返却を求める電話や郵便局への払い出しの同行依頼などがあり、10月9日までの間に約60万円の払い出しをしている。

4カ月のかかわりのなかで、郵便局への払い出しの同行は17回、自宅への訪問は18回、本人からの電話は42回を数えた（2日に1回以上の頻度でかかわったことになる）。

ケース検討会

奥川 今、Oさんのなかで一番引っかかっているのは、どんな点ですか。

Oさん もっとご本人と関係が密にとれていれば、今もかかわりがもっていたのかもしれないと思っています。

奥川 かかわりが切れたことに引っかけりがあるのですか。

Oさん うまく言えませんが、どこか寂しい気持ちがあります。自分としてはかなり濃密なかかわりをしたと思っていたのですが、私がかかわらなくなっても生活できているので――。

奥川 寂しい気持ち――、なるほど。では、その寂しさがどこからくるのか、どうすれば寂しさを感じずにすんだかもしれないか、そのあたりを考えていきましょうか。

Oさん はい、よろしくお願いします。

本人はどんな生活を送ってきたのか

奥川 では、このクライアントとOさんが置かれていた状況をより深くアセスメントするために必要な情報をOさんから引き出してください。

発言 ご本人は若い頃、投機目的の土地購入をしていたということですが、その情報は誰から聞いたのですか。

Oさん 娘さんからです。不動産とか投機といったことに興味があった方のようなのです。

発言 今ご本人が住んでいる土地と家は娘さんの名義になっているんですね。

Oさん はい。

発言 その経緯はお聞きになってますか。

〇さん いえ、聞いていません。

奥川 〇さんは、娘さんの名義になっているという話を聞いたとき、どう思いました？

〇さん 娘さんは別に家も持っていますし、ちょっと変な感じはしました。でも、ケアマネジャーと3人で話している場面で、ケアマネもそれ以上突っ込まなかったのが、流してしまいました。

奥川 ここは大事なところなんです。特に権利擁護事業の専門員としては、土地と家が本人以外の名義になっていると聞いたら、そのことが本人にとって権利侵害になってはいないかと思考回路が働いていいですよ。

〇さん たしかに……。

奥川 それ以外にも、この名義の件は重要な意味をもっている可能性があります。その点は後でまたふれることもあるでしょう。他にご質問をどうぞ。

発言 ご本人と娘さんの仲はよくないということですが、もう少し説明していただけますか。

〇さん ご本人は娘さんに援助をしてもらいたい気持ちをもっているようですが、ふたりで話をしても娘さんは目を合わせようとせず、嫌がっている感じがします。

発言 でも、近所には住んでいるんですね。

〇さん そうです。

発言 ご本人の痴呆はどういう状態

ですか。

〇さん ご本人は「半ボケ」とおっしゃっていますが、まだ意識がハッキリしている時間もかなりあります。ただ、ボーっとした時間が長くなって、部屋の中も乱雑で生活が成り立たなくなったということで、ヘルパーさんが入りました。それからは栄養面が改善されたせいか、身体の方は元気になりました。

奥川 ヘルパーが入ったのはいつですか。

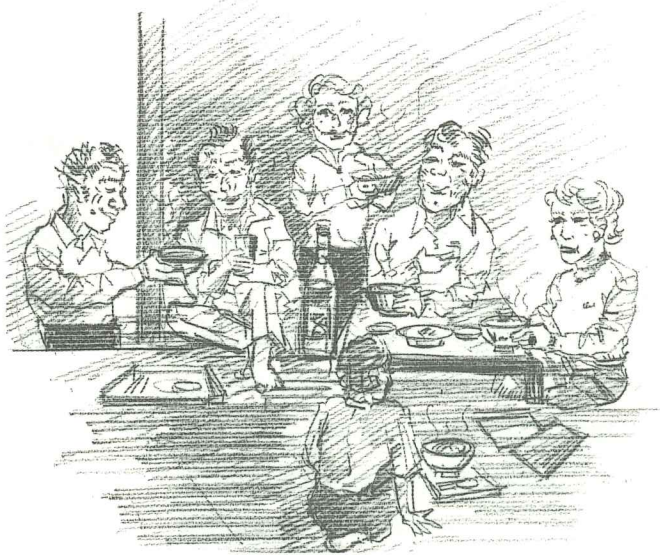
〇さん 1年ほど前からです。

発言 ヘルパーが入っている時間帯は？

〇さん 夕方の5時～7時までです。ケアマネジャーとしては、近所の人泊まるのを阻止したいという気持ちもあって、その時間に入っているようです。

発言 出入りしている近所の人たちというのは、どんな方たちなのですか。

〇さん 80代の女性もいますし、50代のアルコ



ール依存の男性、妻がうつ気味の夫婦などで
す。公園で知り合ったとおっしゃっています。

奥川 痴呆になる前は、ご本人はどんな生活スタイルだったのでしょうか。

〇さん 娘さんの話では、お金の使い方は結構荒かったようです。

奥川 年金を20万円もらっているくらいですし、ひとり暮らしですから、自由になるお金はかなりあったのでしょうかね。

〇さん そのようです。それで投機などもしていたのだと思います。

奥川 以前から近所の人に大盤振る舞いをしたりしていたのですか。

〇さん いいえ。近隣の人の出入りが始まったのは、ここ1年ぐらいのことです。

奥川 ヘルパーが入ってからですか。

〇さん はい。それまではあまり外に出ていなかったようです。ヘルパーが入って身体が元気になって、公園などに出かけるようになってからだと思います。近隣の人たちも、本人が招いてくれるし、なんとなくお金がありそうだという感じで入ってきたのだと思います。

奥川 以前は炊事は自分でしていたのですか。

〇さん 出来合いの物を買ったり、店屋物が多かったようです。一度訪問しているときに出前の人と会ったのですが、出入りしている人の分も合わせて5000円分くらい払っていました。

奥川 痴呆になる前から、そういう生活をしていたのでしょいか。外で食事をしたり、出来合いのおかずを買ったり、店屋物をとったりとい

った——。

〇さん そうかもしれません。ヘルパーやケアマネが訪問しても、すぐに「出前をとりましょう。一人前じゃとれないから」と言うそうです。

奥川 なるほど。そう考えると、出入りしている近所の人たちというのも、本人にとっては？

〇さん 一緒にいてくれると、出前をとるのに都合がいい——。

奥川 そういう面があるかもしれませんね。もう一つ、この方の過去の生活の仕方をうかがう材料として考えられるものがありますね。

〇さん ……ちょっとわかりません。

奥川 貯金はいくらあるんですしたっけ？

〇さん なるほど。10月に娘さんが管理することになったのは350万円です。

奥川 公務員として定年まで勤めて——当然退職金もあるはずですが——年金も月20万円ある。娘もとくに結婚して独立している。そういう条件を考えると、その額はどうですか？

〇さん 決して多くはないと思います。収入もそれなりにあったけれども、土地に投機したり結構使ってきた方なのかもしれません。

娘の理解度

奥川 ここで合わせて考えるといいのは、最初に出てきた家の名義の件です。つまり、娘はいつ、何のために土地と家の名義を自分に変えたのかです。

〇さん 理由は聞いていませんが、名義を変更したのはそれほど前のことではないと思います。

奥川 そのことから、どんなことが読みとれますか？

〇さん 娘さんはお母さんの状態を理解していて、先々の見通しももっている——。

奥川 そうですね。成年後見の申請をしているあたりからも、見通しをもっている方だということがうかがえますよね。援助職者は、そういうことに早く気づくことが大事なんです。お母さんからの度重なる呼び出しにその都度対応している時にも、娘は肝心なところはちゃんと手を打っているということを意識していたかどうかです。

〇さん そこまではまったく意識していませんでした。

発言 すみません。今の家の名義の件に関してですが、地域福祉権利擁護事業に携わっていると、つい母親が亡くなった時に取りっぱぐれないように手を打っているのかな、と悪いほうにとってしまうのですが……。

奥川 その点は、〇さんはどう思いますか？

〇さん 娘さんは、口では「強制入院させたい」と言いつつも、決して入院させていませんし、だんだん生活が成り立たなくなってきたのを発見してケアマネジャーにつないだのも娘さんだと思います。成年後見を自ら行ったのも、ご本人のことを心配する気持ちがあるからだと思います。

奥川 時に感情的になったりするけれども、親子の絆はあるということですか。

〇さん 私の目にはそう見えます。

奥川 では、娘さんとしては、土地と家は押さえた。貯金の350万円も押さえた。でも、郵便局に入ってくる20万円には手を出していませんよね。これはどういうことだと思いますか？

〇さん そのお金は本人が自由に使えばいいと思っている——。

奥川 そういうことですよ。娘さんはご本人の現在の生活と今後についてどう考えているのか、お話を伺ったことはありますか。

〇さん いえ、ご本人への対応だけで、娘さんとはほとんどともに話したことはありませんでした。先ほどから、もっと娘さんの意向を聞くべきだったなと思っていました。

誰のニーズで動いていたか

奥川 先ほど、ヘルパーを夕方入れているのは、近隣の人が泊まらないようにするためだということでしたね。

〇さん はい、ケアマネジャーとしては、その点をかなり心配しているようです。

奥川 客観的に見て、近所の人が出入りするようになってからのご本人の様子はどうですか。

〇さん 以前の様子は直接知らないのですが、着ている洋服などはいつもおしゃれをしています。訪問すると、だいたい指輪もしています。

奥川 もしかすると、本人にとっては近所の人が自分の家に来ることで生活が明るくなっているのかもしれませんがね。たとえそうでなくても、援助職者がそういった部分にまで介入する権利があるのかどうかです。というのは、娘さ

んも月々入ってくる20万円は本人が自由に使っていていいと認めているわけですし、そのお金をどんなふうに使ったって本人の自由ですよ。本人が生き生きと暮らせているならそれでいいじゃないか、という見方もできるわけです。

0さん なるほど——。言われてみればそうですね。

奥川 そこで重要なのは、0さんを動かしたのはいったい何だったのかということです。

0さん うーん、ケアマネジャーと郵便局のプレッシャーですね (笑)。

奥川 本人の意向は？

0さん ご本人は、通帳の再発行手続きをしたという程度だったと思います。

奥川 ということは、どういうことですか？

0さん 本人のニーズではなく、ケアマネジャーと郵便局のニーズで動いていた——。

奥川 困っていたのは本人ではなくて、ケアマネと郵便局だったんですよね (笑)。言い換えれば、0さん自身が権利擁護事業の専門員として、本人の権利が侵害されているという判断をしたかどうかということです。



0さん 恥ずかしい話ですが、そういう判断はしていませんでした。周りの人たちの要望にだけ応えようとしていて、自分の目できちんとアセスメントをしていませんでした。

奥川 大事なところに気づきましたね。

「寂しい」のはなぜか

奥川 では、0さんが引っかかっている「寂しさ」について考えていきましょう。その気持ちはどこから出てきているものですか？

0さん 今はホームヘルプサービスを利用しながら、娘さんに通帳を預かってもらって落ち着いた生活されているようなのですが、自分は何の役に立つこともできなかったな、という気持ちがあります。

奥川 4カ月間かかわったけれども、ご本人が落ち着いた生活を送れるようになるのには役立てなかったのではないかと、そう感じているということですか。

0さん はい。ただ単に貯金を減らしてしまっただけというか……。

奥川 今振り返ってみて、なぜそうなってしまったのだと思いますか。

0さん これは自分の仕事の癖だと思うのですが、基本的に受け身というか、要望されたことには応えるけれども、自分からはなかなか積極的に働きかけないところがあります。このケースではそれが顕著に出て、関係がうまくつくれずに、いつも対応が後手後手になっていたと思います。

奥川 関係がつかれなかったという点と対応が後手後手になったということは分けて考えたほうがいいと思いますよ。まず、なぜ後手後手になってしまったのかを考えてみましょう。この点については、皆さんどう思いますか。

発言 先ほど、最初にアセスメントがなされていなかったという話が出ましたが、援助経過をお聞きしていると、支援計画を自分のなかで立てて、それに基づいて援助をしているという感じがしなかったのですが。

Oさん おっしゃるとおりだと思います。ケアマネジャーや郵便局の要望に応えるためにかかわり始めて、その後援助職者としてのアセスメントや支援計画を立てていませんでした。そのために、その場限りの対応に終始してしまったのだと思います。

奥川 大事なところに気がつきましたね。Oさんの個性を無理に変える必要はありませんが、本人ときちっと向き合って、本人は今どんな状況に置かれているのか、現在の暮らしぶりはこれまでの生活とどのくらい変化しているのか、痴呆の進行具合はどの程度なのか、どういうニーズがあるのかといったことをきちんとアセスメントしようとする姿勢があれば、決して受け身になることはありませんよ。

Oさん はい、わかりました。



奥川 では、もう一つの「関係づくりができなかった」という点について考えてみましょう。

Oさんは先ほど、自分からはなかなか働きかけないタイプだとおっしゃいましたが、何度も郵便局へ同行したり自宅へ訪問している間には、いろいろとやりとりがあったのではないですか。

Oさん はい。特にあそこでもう少しくまぐ対応できていれば違ったのかなと思う場面はあります。

奥川 どういう場面ですか？

Oさん かかわり始めてから1カ月半くらい経った時でしたが、郵便局の帰りに公園で休憩したのです。その時に、ご本人が「毎日つまらなくて死にたい。もう十分生きた」とおっしゃるので、「周りにお友達もたくさんいるじゃないですか」とか「猫ちゃんもいるし」となぐさめたのですが、「若いからあなたにはわからないわね」と言われて、思わず言葉に詰まってしまい

ました。

奥川 その言葉を聞いて、Oさんはどう感じたのですか。

Oさん 何とか前向きな言葉を返したいと思ったのですが、自分のなかで説得力のある言葉が思いつかなくて……。

奥川 本人が言うとおりの「自分にはわからないな」と思った？

Oさん はい。

奥川 こういう場面、皆さんだったらどうしますか。

発言 「私にはわからないかもしれないけど、せっかく出会ったんですから、私はあなたと一緒にやっていきたい」というようなことを言うと思います。

奥川 どうですか、Oさん。

Oさん そこまでは気恥ずかしくて言えません(笑)。でも、「私もお手伝いをする人のなかに入れてください」とは言いました。

奥川 そうしたら？

Oさん 「もう入ってるわよ」とおっしゃってくださいました。

奥川 だったら、ちゃんとOさんの気持ちは伝わっているじゃないですか。人生のキャリアの長い方ですから、きっとOさんのシャイな性格も十分わかっていらっしやると思いますよ。

Oさん そうだといいいのですが。

奥川 アルツハイマーが始まりつつある時期に特有の、奥深い奈落の底に落ちてしまうような恐怖感や絶対的な孤独感というものは、決して

他者が共有できるものではありません。だから、Oさんが「自分にはわからない」と思うのは当然なんです。ただ、気持ちを込めて「その辛さというのは、ご本人じゃないとわかりませんよね」というようなことは言えますよね。

Oさん たしかに……。そういった言葉があると、ご本人の気持ちもずいぶん違うと思います。

奥川 でも、きっとOさんの気持ちは通じていると思いますよ。おそらく、Oさんがかかわっていた時期が、痴呆の初期の心身の歯車が狂っていた不安定な時期だったんです。今はその時期が過ぎて、落ち着いたということでしょう。

Oさんが気にしているお金の引き出しについても、娘さんは納得しているんじゃないですか。

Oさん その件については、娘さんは最後まで一言も触れられませんでした。

奥川 お母さんが自分で稼いだお金なんだから、という気持ちがあったのだと思いますよ。この方には、アルツハイマーの初期にかかわるといふ貴重な経験をさせていただきましたね。

Oさん はい。いい勉強になりました。

奥川 では、最後に感想をどうぞ。

Oさん まずは援助の基本であるアセスメントができていなかったこと、ご本人のニーズではなく周囲の要望に迎合してしまったこと、名義の話など娘さんとお話をすべきだったこと等々、自分の援助が納得いかなかった理由がハッキリしました。今日学んだことを、これからの仕事に生かしていきたいと思います。今日はありがとうございました。